

令和6年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第5号（9月予報）

令和6年8月27日 秋田県病害虫防除所

◇今回の予報対象期間は9月を主とします。次回の発表は令和6年9月25日の予定です。

◇病害虫発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトで読者登録できます。<https://www.e-komachi.jp/>

◇秋田県総合防除計画は、秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病害虫防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	斑点米カメムシ類の発生量はやや多いと予想されます。水田内に収穫したホタルイ類などのカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接しているほ場では、収穫期24日後頃に、畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布剤を散布してください。農道・畦畔及び雑草地の草刈りをする場合は、稲の収穫2週間前以降に行ってください。
大 豆	マメシンクイガの発生量はやや少ないと予想されますが、連作により密度が高まり、被害が増大しますので、連作ほ場では、9月上旬の防除（1～2回）を徹底してください。 食葉性鱗翅目幼虫の発生量はやや多いと予想されます。若齢期での防除を徹底してください。
野 菜 ・ 花 き	病害では、きゅうりの褐斑病、炭疽病、トマトの葉かび病、すすかび病、灰色かび病の発生量が多いと予想されます。発病した葉や茎、果実を除去した上で薬剤防除に努めてください。トマトの灰色かび病については、8月27日発表の防除対策情報第13号を参照してください。 害虫では、キャベツ（秋冬どり）のコナガ、ヨトウガ、野菜・花き共通のオオタバコガ、ハスモンヨトウの発生量が多いと予想されます。発生状況を確認して防除してください。
果 樹	りんごでは、炭疽病、褐斑病、シンクイムシ類の発生量が、なしでは、輪紋病の発生量が多いと予想されます。降雨が続くと予想される場合や発病、被害が認められる園地では薬剤の散布間隔を短くして防除してください。 ぶどうでは、べと病、晚腐病が多いと予想されます。発病葉、発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は除去し、適切に処分してください。

Ⅱ．主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
水 稲	斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	全県	—	やや多い	やや多い
	(アカヒゲホソミドリカスミカメ)			やや多い 多い	やや多い 多い
大 豆	フタスジヒメハムシ	全県	—	やや少ない	平年並
	マメシンクイガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	やや多い
ね ぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや少ない	平年並
	黒斑病・葉枯病	全県	—	平年並	やや多い
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	平年並
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
	シロイチモジヨトウ	全県	—	やや少ない	平年並
きゅうり	褐斑病	全県	—	やや多い	多い
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	やや多い	多い
キャベツ (秋冬どり)	コナガ	全県	—	やや多い	多い
	モンシロチョウ	全県	—	やや少ない	平年並
	ヨトウガ (第 2 世代)	全県	—	多い	多い
トマト	葉かび病	全県	—	多い	多い
	すすかび病	全県	—	—	多い
	灰色かび病	全県	—	多い	多い
	コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	全県	—	平年並	やや多い
野菜・花 き共通	オオタバコガ	全県	—	多い	多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	やや多い	多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	平年並	やや多い
	炭疽病	全県	—	多い	多い
	輪紋病	全県	—	平年並	やや多い
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	多い	やや多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	全県	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	全県	—	少ない	やや少ない

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
ぶどう	べと病	県南部	—	やや多い	多い
	晩腐病	県南部	—	多い	多い

Ⅲ．発生予報と防除対策

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	—	やや多い (前年よりやや多い)
(アカヒゲホソミドリカスミカメ)	—	やや多い (前年よりやや多い)
	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている (/±)。

イ 8月4～5半旬の巡回調査(80地点)における水田内でのアカスジカスミカメのすくい取り数は1.2頭(平年1.1頭)で平年並、発生地点率は26.3%(平年22.6%)でやや高かった (/+)。

また、アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は0.4頭(平年0.2頭)でやや多く、発生地点率は11.3%(平年7.0%)で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 斑点米は、登熟期後半から発生する割れ粳の増加に伴い、側部斑点米が主体となるので、2回目の防除が重要となる。そのため、水田内に出穂したホタルイ類などのカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接しているほ場では、出穂期24日後頃に、畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布剤を散布する。

イ 茎葉散布剤は、キラップフロアブル・同粉剤DL(使用時期は収穫14日前まで)又はエクシードフロアブル・同粉剤DL(使用時期は収穫7日前まで)とする。ただし、セジロウンカが多発しているほ場では、同時防除が可能なエクシード剤を選択することが望ましい。

ウ 殺虫剤を散布する際は、養蜂業者などと連携をとり、蜜蜂などへの危害防止に努める。

エ 農道・畦畔及び雑草地(法面や休耕田など)の草刈りをする場合は、稲の収穫2週間前以降に行う。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 フタスジヒメハムシ	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 8月5半旬の巡回調査(16地点)における株当たり成虫数は0.00頭(平年0.02頭)でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多発ほ場はアグロスリン乳剤などで防除する。

イ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 マメシクイガ	－	やや少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア ８月５半旬の巡回調査（16地点）における叩き出し成虫数は0.6頭（平年1.1頭）でやや少なく、発生地点率は18.8%（平年27.0%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 連作により密度が高まり被害が増大するので、連作ほ場では防除を徹底する。

イ 薬剤は次のいずれかを散布する。

- ① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は９月上旬までに１回散布する。
- ② エルサン乳剤、グレーシア乳剤、スミチオン乳剤、トレボン剤（粉剤DL、乳剤、EW）、プレバソフロアブル5、ヨーバルフロアブルは９月上旬に１～２回散布する。なお、前年多発したほ場では２回散布とする。
- ③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソフロアブル5のいずれかを９月上旬に２回散布する。
- ④ エルサン乳剤、トレボン剤、プレバソフロアブル5は成分の総使用回数に注意する。

ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 食葉性鱗翅目幼虫	－	やや多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ８月５半旬の巡回調査（16地点）における株当たり頭数は0.1頭（平年0.1頭）、発生株率は10.5%（平年8.9%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ツメクサガは葉だけでなく莢も食害するため、エルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを莢によく付着するように散布する。

イ ハスモンヨトウはトレボン乳剤、パーマチオン水和剤などを散布する。無人航空機で散布する場合は、トレボンエアー、トレボンスカイMC、プレバソフロアブル5のいずれかを散布する。なお、ジアミド系剤などの一部の薬剤に感受性の低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

ウ 老齢期になると薬剤の効果が劣るので、若齢期に防除する。

C ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 さび病	－	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量は多いと予報されている（ /＋）。

イ ８月４半旬の巡回調査における発病株率は0.2％（平年2.6％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 夏どりねぎの被害残さは、ほ場外で処分する。

イ 多発すると防除効果が劣るので、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（同：3）、カナメフロアブル（同：7）などを散布する。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病・葉枯病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量は多いと予報されている（ /＋）。

イ ８月４半旬の巡回調査における発病株率は5.4％（平年5.9％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 適正な肥培管理を行う。

イ 本県における秋季の発生は、葉枯病が主である。葉枯病が原因の黄色斑紋病斑は、収穫物の品質低下につながるので、アミスター20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルを組み合わせ、9月上旬～10月上旬に約10日間隔で散布する。

ウ さび病などの発生や害虫による食害は、本病の発生を助長するため、他の病害虫の防除も合わせて行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /±）。

イ ８月４半旬の巡回調査における食害株率は32.6％（平年37.1％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、ダントツ水溶剤（同：4A）、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、ベネビアOD（同：28）、ディアナSC（同：5）、グレースシア乳剤（同：30）、ファインセーブフロアブル（同：34）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ネギハモグリバエ	－	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月４半旬の巡回調査における食害株率は4.0％（平年14.5％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ベネビアOD（同：28）、ダブルシューターSE（同：5・未）、グレーシア乳剤（同：30）、ディアナSC（同：5）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 シロイチモジヨトウ	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月４半旬の巡回調査における食害株率は0.0％（平年1.2％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が作物内に食入したり、幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が劣るので、発生初期（若齢期）にアグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、カスケード乳剤（同：15）、グレーシア乳剤（同：30）、ディアナSC（同：5）、ノーモルト乳剤（同：15）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布する。その際は、収穫前日数に注意する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。また、薬剤への感受性の低下が疑われた場合は、感受性低下が疑われる薬剤を本害虫を対象とした防除薬剤として使用しない。

D きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 褐斑病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月後半の巡回調査における発病株率は22.0％（平年16.3％）でやや高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ 発病前からシトラノフロアブル（ＲＡＣコード：M1・M5）、ジマンダイセン水和剤（同：M3）、セイビアーフロアブル20（同：12）、ダコニール1000（同：M5）などの予防剤を中心に散

布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤（同：10・2）など、治療効果のある薬剤を散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（同：7）、QoI剤（同：11）では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

オ 翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	－	やや少ない（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /±）。

イ 8月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年1.1%）でやや低かった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 冷涼多湿条件で発病が多くなるので、山間高冷地では予防散布に努める。

イ 発病前から定期的にベフドール水和剤（RACコード：M7・M1）、ジマンダイセン水和剤（同：M3）、ダコニール1000（同：M5）などを散布する。発病を確認した場合は発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤（同：3）、トップジンM水和剤（同：1）などを散布する。

ウ 翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	－	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。

イ 8月後半の巡回調査における発病株率は22.7%（平年14.6%）でやや高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 発病部位は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ ジマンダイセン水和剤、銅水和剤などによる予防散布に努めるとともに、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゲッター水和剤（同：10・1）など、治療効果のある薬剤を散布する。薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用せず、高温時の使用は避ける。

ウ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

オ 翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

E キャベツ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 コナガ	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ８月４半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.15頭（平年0.10頭）でやや多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発生初期で幼虫の密度が低い場合は、遅効性で残効の長い昆虫成長制御剤（ＩＧＲ剤）又はＢＴ剤を散布する。

イ 発生が多い場合は、グレーシア乳剤（ＲＡＣコード：30）、ブロフレアＳＣ（同：30）、アフーム乳剤（同：6）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、ディアナＳＣ（同：5）、フェニックス顆粒水和剤（同：28）などを散布する。なお、グレーシア乳剤、ブロフレアＳＣ、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるので、防除回数を減らすことができる。

ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 モンシロチョウ	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ８月４半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.02頭）でやや少なかった（ /-）。

（２）防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ヨトウガ（第2世代）	－	多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ８月４半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.03頭（平年0.01頭）で多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除が可能である。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

4 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
黒腐病	—	平年並	やや少ない	気温は高いと予報されている。
アブラムシ類 (モモアカアブラムシ)	—	やや少ない	平年並	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ 8月中旬の巡回調査における発病株率は52.2%（平年26.4%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病初期からGetter水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（同：M5）、ベルクート水和剤（同：M7）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ 8月中旬の巡回調査における発病株率は41.0%（前年0%）だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病初期からニマイバー水和剤（同：10・1）、トリフミン水和剤（同：3）、ファンベル顆粒水和剤（同：11・M7）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ 8月中旬の巡回調査における発病株率は32.0%（平年10.0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 8月27日発表の防除対策情報第13号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 8月中旬の巡回調査における発生株率は0% (平年0.1%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス内外の除草に努める。
- イ 摘葉後は、残さを早期に処分する。
- ウ 多発すると防除効果が劣るので、発生初期からチェス水和剤、トランスフォームフロアブル、モスピラン顆粒水溶剤などを散布する。

G 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 防除適期決定ほ (3地点) における7月5半旬～8月3半旬のフェロモントラップの総誘殺数は121.9頭 (平年37.2頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので、注意深く観察し、捕殺する。
- イ 初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ハスモンヨトウ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 秋田市防除適期決定ほにおける7月5半旬～8月3半旬のフェロモントラップの総誘殺数は853頭 (平年373頭) でやや多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。
また、ジアミド系剤などの一部の薬剤に感受性の低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

H りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は2.5％（平年2.6％）、同地点率は85.0％（平年85.2％）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病葉を除去し、園外で処分する。

イ アリエッティC水和剤（RACコード：M4・P7）、ダイパワー水和剤（同：M7・M4）、ナリアWDG（同：11・7）、ストロビードライフフロアブル（同：11）などから選択して散布する。

ウ ストロビードライフフロアブルを使用する場合は、耐性菌の出現を回避するため保護殺菌剤（ベルコート水和剤など）に加用し、２回以内の使用とする。

エ イミノクタジンの開花期以降の総使用回数が３回以内であるため、本成分を含むダイパワー水和剤、ベルコート水和剤の使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 炭疽病	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は0.12％（平年0.01％）、同地点率は25.0％（平年2.3％）でいずれも高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。

ウ 薬剤の選択及び注意事項は、１ 斑点落葉病のイ、ウ、エに準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	－	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は０％（平年０％）、同地点率は０％（平年０％）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。なお、本剤の使用回数は３回以内である。

イ 薬剤の選択及び注意事項は、１ 斑点落葉病のイ、ウ、エに準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 褐斑病	—	多い（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病新梢率は4.8％（平年0.1％）、同地点率は65.0％（平年3.8％）でいずれも高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 密植や枝が重なった部分などに多発するので、不要な徒長枝を除去する。
- イ 薬剤の選択及び注意事項は、１ 斑点落葉病のイ、ウ、エに準じる。
- ウ 発生の多い園地では薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における被害果率は0.30％（平年0.04％）、同地点率は15.0％（平年2.8％）でいずれも高かった（ /+）。
- ウ 防除適期決定ほ（６地点）における８月１～４半旬のフェロモントラップへの地点当たり平均誘殺数は38.5頭（平年77.8頭）で少なかった（ /-）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、６日以上おく。
- イ ピレスロイド系剤（ＲＡＣコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 ハダニ類 （ナミハダニ、リンゴハダニ）	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.5頭（平年1.7頭）でやや少なく、同地点率は60.0％（平年55.6％）で平年並だった（ /-）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤の使用回数は１薬剤１回、かつ作用点が同一の殺ダニ剤の使用回数は１回として、効力低下を防止する。
- ウ ダニオーテフロアブルを使用した園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。
- エ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。

- ① コロマイト乳剤はストライド顆粒水和剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤又はベフラン液剤25との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（6地点）における8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の地点当たり平均誘殺数は0.2頭（平年10.0頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ 園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤のいずれかを散布する。

I なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は多いと予報されている（ /+）。

イ 8月中旬の巡回調査における発病果率は1.4%（平年1.0%）でやや高く、同地点率は30.0%（平年51.3%）で低かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉及び発病果は伝染源になるので切除し、園外で処分する。

イ 落葉を集め、焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は0.3％（平年0.2％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 南水、二十世紀、新水、八雲などの品種で発生しやすい。
- イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除し、園外で処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	—	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ 主な感染期間である６～７月の降水量は平年並～多かったことから、感染量はやや多かったと推定された（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア いぼ病斑の多い枝は伝染源になるので切除し、園外で焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における被害果率は０％（平年0.0％）で平年並だった（ /±）。
- ウ 防除適期決定ほ（４地点）における８月１～４半旬のフェロモントラップへのモモシンクイガの地点当たり平均誘殺数は37.8頭（平年78.6頭）で少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、６日以上おく。
- イ ピレスロイド系剤（ＲＡＣコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。
- ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 8月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.03頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤の使用回数は1薬剤1回、かつ作用点が同一の殺ダニ剤の使用回数は1回として効力低下を防止する。
- ウ 殺ダニ剤を使用する際は、次の点に注意する。
- ① コロマイト水和剤は高温・乾燥時の散布や、樹勢の弱っている樹への散布で、葉に葉害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので散布しない。
 - ② ダニオーテフロアブルを使用する園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 防除適期決定ほ（4地点）における8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の地点当たり平均誘殺数は0.8頭（平年7.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。
- イ 園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤のいずれかを散布する。

J ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 べと病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。
- イ 8月中旬の巡回調査における発病葉率は6.4%（平年0.9%）で高かった（ /+）。
- ウ 8月中旬の巡回調査における発病果房率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉及び発病果房は切除し、焼却するか土中に埋める。

イ 落葉を集め、焼却するか土中に埋める。

ウ 有袋栽培の場合は、コサイド3000、ホライズンドライフロアブル、4－4式ボルドー液、ムッシュボルドーDF、ICボルドー66D、Zボルドーなどを散布する。ただし、コサイド3000、ムッシュボルドーDF、Zボルドーは薬害（落葉）を生じるおそれがあるので、クレフノン100倍を必ず加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 晩腐病	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は多いと予報されている（ /+）。

イ 8月中旬の巡回調査における発病果房率は2.03%（平年0.03%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

IV. 気象予報

令和6年8月22日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（8月24日～9月23日）

（1）予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
- ・ 低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は東北日本海側で平年並か少ないでしょう。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

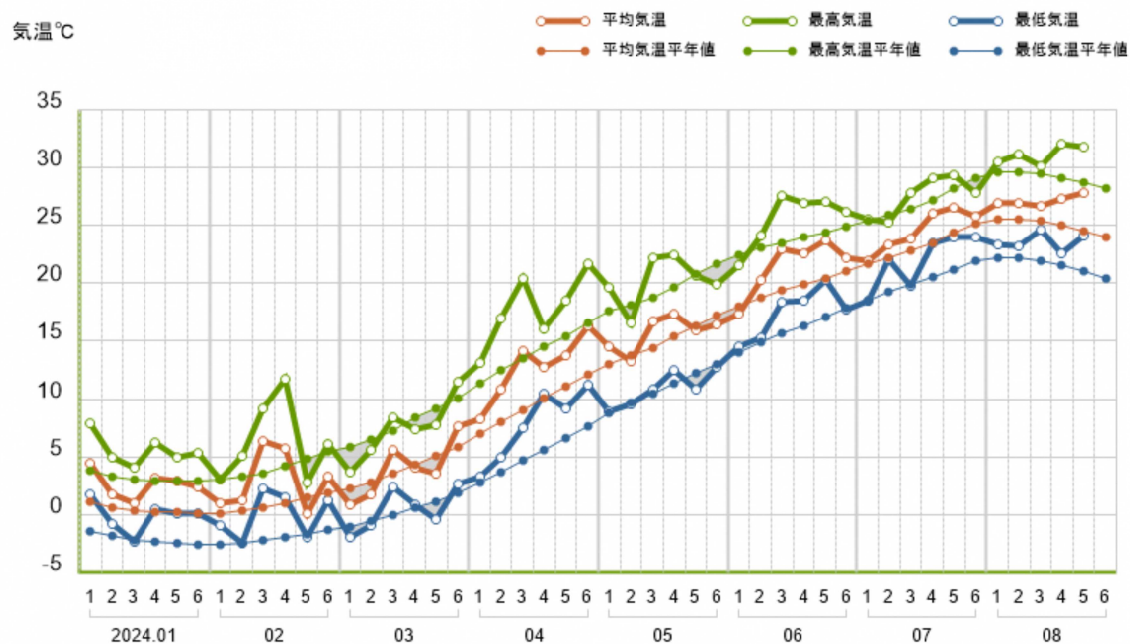
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	10%	80%
降水量	20%	30%	50%
日照時間	40%	40%	20%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

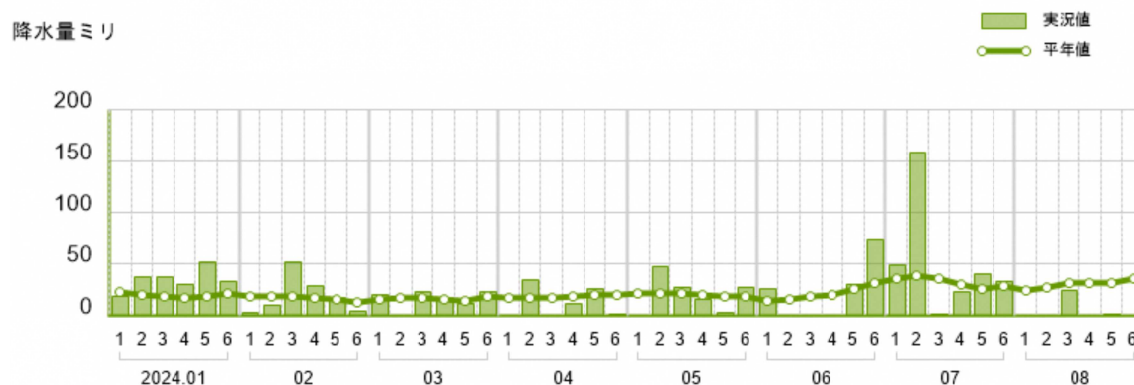
	低い	平年並	高い
8/24～8/30（1週目）	10%	10%	80%
8/31～9/6（2週目）	10%	10%	80%
9/7～9/20（3～4週目）	10%	30%	60%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～8月5半旬 秋田県農業気象システムより)

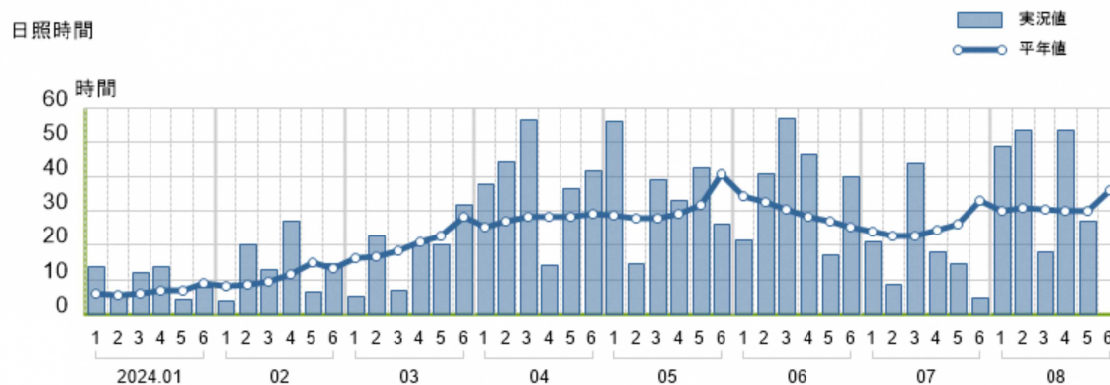
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%	
評価	少ない	やや少ない	平年並			やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○ 安全使用の基本事項

- ・ 農薬の使用基準を遵守する。
- ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・ 防除履歴を必ず記録する。

○ 農薬使用上の注意

・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。

- ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

○ 農薬取扱い上の注意

- ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移しかえて保管しない。また、食品と一緒に保管しない。

問合せ先

秋田県病虫害防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231
天王分場チーム TEL 018-878-2251